

第二章 藍色の家族

髪形のことである。

当時の女性の髪形といえば、未婚者が島田髷、既婚者が丸髷、というのがおおよそ定番になっていた。どちらの結び方も基本的には同じであり、長い髪を後ろで束ね、前髪側に倒して丸める。この丸め方で髷に変化をつけるのだが、髪の根を元結で締めあげる辛さといったら、

「まいど頭皮が悲鳴をあげる」と豊が言い出したのをきっかけに、なをの新居に女四人が集まった。

豊は日ごろの鬱憤をぶちまけるように、髷の形を見れば一目で未婚か既婚かわかってしまうのがわずらわしい、出戻り女は髪形をどうすればいいかでまず悩む、いちど丸髷にしたものを島田に戻すのも気恥ずかしいじゃないか、などと、盥に髪を浸しながら愚痴をこぼしている。年の瀬も間近、綿のものでも着ていないと芯まで冷える日和であったが、豊は諸肌を脱いで縁側にいる。まだ若々しい素肌に粟立つものもみせないのは、子供の頃から道場の寒稽古で鍛えられてきたからだろうか。引き締まった二の腕を眺めていた金物屋のりうが、

「豊姉さんたくましいわあ」と感心しきりである。

布海苔をお湯で溶かし、それにうどん粉を混ぜ合わせたもので洗髪する。

「お湯が少し熱いね」と言いながら、手拭いを姉さんかむりにしたすまが、りうと二人がかりで豊の髪をすすいでいた。「なを、これじゃあ髪が傷むから水を足して」

土間から手桶を提げてきたなをのお腹が、近頃はそれとわかるぐらいにふくらんできたようである。

豊が座り直して襦袢を羽織ると、三人がかりで濡れ髪を拭いた。その間中ずっと思案に暮れている様子の豊だったが、やがて意を決したように、

「やるわ、あたし。じれった結びと切り前髪にしてちょうだい」

そう、きっぱり言った。

すまとなをの顔に一瞬緊張が走ったが、りうばかりは目を輝かせて、「ついに、やるんですね」感慨深げにうなづく。

普段であればおしゃべりの合間に手際よく髪を結ってくれるすまも、今回ばかりはただ事では済まないような面持ちになる。

いつもなら洗髪の仕上げに伽羅の油をつけて島田か丸髷に結い上げるのであるが、今回はそのいずれでもなく、後ろ髪を一巻き結んで垂らすだけ。いちいち髪を束ねるのがじれったいからこうなったという「じれった結び」である。これだけでも当時の常識からすれば大胆なのに、さらには前髪を短く切り、櫛を逆さに差して逆立てる。これぞ近年まれにみる悪名高き流行、富家の奇抜な子女しかやらないと揶揄される「切り前髪」で、さらに付随する化粧と着こなしまである。目のまわりを濃い赤色で縁取り、まぶたに薄っすらと紅を塗る。こうすることで酒に酔った顔色を表現している、などと解説を交えつつ、五大力船経由で耳に入れた江戸の最新お洒落事情に従って、すまは手際よく豊を粉飾してゆく。上唇を真っ赤に塗りたくり、下唇は笹紅を塗り重ねて玉虫色にするあたり、もはや公序良俗の一線を越えているかもしれない。地味で渋めな着物を好むのは相変わらずの流行りであったが、その上に男物の羽織を引っかけて、わざと肩の部分をずり下げるところなど、細部にもこだわりがある。いわゆる「カブキモノ」の装いなのだ。

「できた」

すまは何かに挑んでやり遂げたような達成感を味わいつつも、豊に鏡を見せていいものかどうか、なをに視線を向けてみる。

なをも困ってりうの顔色をうかがったが、りうは興奮した様子で手鏡を豊の顔にかざした。

しばし鏡に見入った豊は、

「これ、お上に喧嘩売ってないかい」

さすがに腰が引けたが、りうは心外とばかりに声を励まして、

「素敵です。わたしにはとても真似できないけれど、ぜひその格好で町を歩いてください。きっと木更津中の女が喝采します」と断言するのだった。

話題を替えたかったわけでもないのだが、なをが思い出したように「八つ茶にしましよるか」と腰を上げると、急に小腹がすいてきた気がする。

なをと三千太郎の新居は、島屋の敷地の中でも通りを挟んだ向かい側にある離れ座敷だった。目抜き通りから少し奥に入っただけで、往来のにぎやかな物音もほとんど聞こえず、風通しがいい。なによりなをのお気に入りは広い土間で、新しい荒神様がカマドの上に飾られている。

大皿に盛られたてっぼ巻きは、酢飯にしないので手軽に作れる軽食である。白米を焼き海苔で巻き、醤油をかけたカツオ節を芯に入れている。

「もう海苔の季節なんだね」と、すまはしばし初摘みの匂いを楽しむのだった。

注がれたお茶の、品のいい味と香りは、これはきっと玉露だろうとりうは思った。八つ茶にさりげなく最高級のもので出てくるあたり、さすがは大河内家だと感心しきりなのは、りうが標準的な商家の娘だからだ。

「豊姉さんのお母さんは江戸のひとなんですよね」

一口目の甘味を味わいながら、りうがたずねた。

母は、鶴といった。幕臣の娘で、総三郎が江戸の宮田一刀流道場で塾頭を務めていた頃が馴れ初めであると聞いたことがある。

かなり以前から、総三郎と豊の父娘関係はうまくいっていない。

「あたしね、もうしばらくしたら江戸へ越そうかなって考えてるんだ。母さんもオヤジと別居して長いから、そろそろ潮時だと思ってね」

それを聞いてなをが目を丸くした。「うそ、姉さん江戸に行ってしまうの」

「もちろん、なをの出産が済むまではいるよ。あたしさあ、なをとミチタのねんねこを見るのが楽しみで仕方ないんだ。可愛いだらうねえ」

すまが少々ひがんだ様子で苦笑する。「なをに先を越されちゃったなあ」

米粒のついた指先を舐めながら、豊が諭すように言う。

「すまは新一郎のことが好きでしょ。大切なのはそこ。あたしの別れた亭主なんか、剣の腕が立つっていうただそれだけの理由でオヤジが婿にとった男でさ、一介の武弁を地で行くつまらないやつだった。すまもなをも、好いた男と所帯を持たただけでも充分幸せなことなんだからね」

それもそうだと納得したようにすまがうなずくと、今度はりうがため息をつく。「あたしもそろそろ結婚したいなあ」

「しょうじゅとうまくいってるんでしょ」

「まだそんなんじゃないですよ」たちまちりうの頬が真っ赤になる。

「わたし、このあいだ勝壽さんに、子宝に恵まれたなをさんがうらやましいって言ったんですよ。そしたら勝壽さん、すぐくまじめな顔をして呪文のような言葉をつぶやいたんです。わたし、そのことばの響きになんだかとてもありがたいものを感じたから、紙に書いてもらいました」と、小さく折った紙片を帯から取り出してみせた。「お守りにしています」

矢立でしたためたと思われる細い字で、

夫婦交合して子を儲る事は実に皇祖天神の恩賜(みとのまぐわい)してこをもうくることはまことにこうそてんじんのみたまもの)

と書かれている。それを見て、豊はお腹を抱えて笑った。

「さすが八劔の御曹司だね、いやらしさが無いよ。高尚だなあ」

「どういうことですか。勝壽さん、わたしのことどう思っているんでしょうか」

「しょうじゅはりうのことが大好きなんだよ」と言い含めて笑い続けた。

火鉢にかけた鉄瓶が細い湯気をたてている。

「さて」と豊の表情が曇る。

「じれった結びをほどこうか、それともこのまま過ごそうか」

なをとすまは即答できなかった。率直に言って、豊の装いが可愛らしく、とても似合っているように思われたからである。が、この風体で出歩いたとき世間から向けられる眼差しを思えば、無責任な意見は慎まなければならぬだろう。

「あたしはさあ、もう結婚する気もないし、何事にも縛られたくないんだよね。女はこうあるべきとか、親に従えだとか、人生五十年も生きられりゃあいいぐらいなんだから、やりたいようにやれないかなって、このごろ本気でそう思うんだよ」

「わかります」膝を詰めて賛同したのはりうであった。

「うちの親も勝手に縁談とか持ってくるんです。わたしの考えを聞いてもくれない。なんか、そういうことにすぐ腹が立ちます。鬩だってそうですよ。いつもこうして結い上げているのは、はっきりいつてきついです。寝るときだって髪形を崩さないようにすぐく神経を使うじゃないですか。どうして垂らしちゃいけないのかな」

りうの投げかけた疑問に誰も答えられなかったが、その不満には一理ある、というその場の空気に、豊は背中を押された気がした。

とはいっても、白昼の往来を横切って本邸に帰るだけでも人目が気になって仕方がない。結局豊は袖で顔を隠しつつ、こそこそ店の裏木戸へまわった。

藍甕の間を歩いていると、縁台に腰かけてキセルを吸っている縫之進と目が合った。

あっと驚いたように立ち上がった縫之進は、

「豊姉エ、その恰好……」そうつぶやいたまま茫然とした。

「へへ。やっぱりおかしいよね」

「とんでもない。これまで見た豊姉エの中で、一番綺麗だ」

「ほんとかい？ からかってるんじゃないよね」

「おいおい、おれを誰だと思ってるんだ。服飾についちゃあ、ちったあうるせえ男だぜ」と興奮を隠せない様子で、鞠のように丸められた後ろ髪を手を取ってみたり、下唇に塗られた玉虫色に指をつけてみたりした。

「笹紅の緑をここまで輝かせることができるのは、すまさんしかいねえな。目のふちの利

かせも実にいい。いやはや、これが泣く子も黙るじれった結びの装いか」

「あたしを馬鹿だと思ukai」

「豊姉エ、これはすごいことだぜ。いつの時代にもカブキ者はいたが、これほどのデタラメぶりはさすがになかっただろうよ。黒船が江戸っ子に与えた衝撃は、こんなところにまで影響を及ぼしているのかもしれないな。新しい時代の始まりを感じるよ。豊姉エは最先端だな、尊敬するぜ」

縫之進に絶賛されたのであれば、美の太鼓判を押されたようなものだから、身の内にはっと自信も湧いてこようというもの。豊は堂々と往来へ躍り出た。

そこに折しも、総三郎が帰って来、豊の姿を見るなり足をすくませ絶句した。

「おまえ、気は確かか」

途端に豊の自信が揺らいだ。

「いかに天下騒忙とは申せ、大河内の者ならば気をしっかり持て。取り乱すのはまだ早い」などと、あらぬ叱言を口走る。

豊はカツとなると同時に涙がこみ上げてきて、

「だまれ糞オヤジ！」

前髪を逆立てていた三日月櫛をはずして総三郎に投げつけると、踵を返して駆け戻ってしまった。

この時期、切り前髪やじれった結びなどというものが一部でもてはやされたのも黒船来航の衝撃ゆえか、との縫之進の分析はあながち突飛ではなかったかもしれない。やがて東海地方の民衆が顔に白粉を塗りたくり、エエじゃないかと踊り出すだろう。

人心の荒廃も顕著になりつつある。

幕府や諸藩が内外の危機に備えて米穀を蓄え始めると、商人がこれに便乗して買い占めに狂奔した。木更津のように運送業や港湾労働者の多い地域の住民は飯米を金銭で購入する他なく、米価の高騰は死活問題へと直結する。慶応元年には金一両で二斗二升五合買え

た米が、翌年になると一斗六升しか買えない。米穀商へ抗議する人々は殺気立っており、ややもすれば打ちこわしへと発展しかねない一触即発の事態が頻発していた。この状況下で身を挺して調停役を務めているのが、他ならぬ総三郎なのである。島屋の私費を投じて市場にまで介入し、時に刀の柄に手をかけて商人を恫喝することも辞さず、米価の高騰を抑えるために日夜奔走している。増え続ける強盗や傷害事件の類も捨て置かず、島屋門を指揮して治安維持の強化を図ってもいた。

不二心流の思想がそうさせるのである。

日本の武術は多くの場合、流祖の見神体験をもって一派の発足となることが多い。天真正伝香取神道流を起こした飯笹長威斎は経津主神から一卷の神書を与えられたし、陰流の愛洲移香斎は鵜戸明神から奥義書を授かったと伝わる。古の名だたる武芸者の多くが、荒行や参籠の最中に、天狗、猿、河童、あるいは仙人とおぼしき白髪の老翁から秘伝を授けられたり、霊夢によって刀法の妙利を悟ったものであった。が、時代も幕末まで下ると、さすがに人々の思考に近代的な合理性が萌芽しつつあり、神秘譚が疑いもなく受け入れられる時世ではなくなっている。ところが、不二心流を起こした中村一心斎という老剣士には、往古の武芸者に通ずる神秘的な風格があった。

幼名は八平、天明二年、肥前島原藩士中村八郎左衛門の次男として生まれた。身長六尺二寸の大男で、幼少より撃剣の修行に傾倒し、浅山一伝流、心形刀流、神道無念流を学んだ。文政元年、富士山に単身登頂し百日にもおよぶ参籠修練を行う。その間、塩穀を絶ち、百草を食し、神我一体の境地に至って見性悟道を得た。髪は惣髪、顎から胸の下までとどくほどの美髯をたくわえ、茶人や俳人が着用する被布を纏って長剣を横たえていた。左の耳たぶに穴を穿あけて象牙の輪を通し、ここから錦の袋を垂れて長い髭をおさめているという。その姿ほとんど山伏に似たりと記録されている。

不二心流の「不二」は「富士」であり、「二つとない心」「二つ心を持たない」という意味でもある。江戸八丁堀に道場を構えると門下がたちまち三千人を超えてしまうほどの

隆盛ぶりであった。この中から後継者に選ばれたのが若き日の大河内縫殿三郎で、一心齋はその縁を頼って房総へ拠点を移した。老いてなお意気盛んで、若い剣士を気合のみで圧倒し、御前試合で水戸公徳川斉昭に賞賛されたこともある。

一心齋の流儀は「後の先法」といい、自分から打ち込まず、敵の打ち込みを切り返す刀法であった。形試合には「とどめの太刀」がなく、外見上の勝ちさえも求めない。相手を倒すことばかりにこだわる「小さな兵法」を超越し、人の世に平和をもたらすための「大なる兵法」を目指していた。奥義秘伝に〈剣術〉〈柔術〉と並んで〈貨殖〉とあるのが最大の特色で、このような流派はちょっと他にはないだろう。貨殖について書かれた『治国安民之巻』は農業指導書であり、民衆の倫理道德の確立、相互扶助、生活の向上を説いている。中村一心齋という人物は、過酷な剣術修行を経て宗教的な境地に達してしまった人といってよく、気の修煉や呼吸法を重視するあたり、極めて禅的でもあった。彼の歌に、敵はただ心のままに動くともこの身真如の波しづかなりとあるのをみても、雲水のごとき面目を見せている。

剣法自体が護身術的であるため商人や農民に受け入れられやすかったし、何より富士山で道の奥義を悟ったという経歴が、房総の住民に支持される所以でもあった。

平安時代、上総で育った菅原孝標女が『更級日記』に記している。

へわが生ひいでし国にては西面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。く。

まさしく、房総半島の西側にはいつも富士山が見えている。その山容は日に映えて優雅で、山そのものがご神体なのであった。人々は朝な夕なに手を合わせる。不二心流が総州で広く支持されたのは、この土着の信仰に根付いたからでもあろう。

一心齋が七十三歳で亡くなったとき、総三郎は三十歳だった。伊藤実心齋が十六、三千年太郎は八つである。ごく最近まで、耳に象牙の輪っかをぶら下げた大先生は健在であったのだ。

おそらくは一心齋が剣技よりも重視していた治国安民論を、総三郎は物心ついたときから叩き込まれてきたのである。幕府の支配体制が弱体化しつつあり、殊に天領の荒廃は明らかであったから、これを黙して見過ごさず、剣術の指導と共に農村の復興に務めよと一心齋は繰り返し教えた。伝書にも「それ兵法の要は治国安民にとどまる。なんぞ戦闘のためのみならんや。」と記されているほどなのだ。

伊藤実心齋が普段からしつこいぐらい総三郎を糾弾しているのは、治国安民論に傾倒しすぎているという点についてなのである。剣戟の場に身を置いたとき、農村の復興が何の役に立つのか。武術は個人の鍛錬の上にか実を結ばず、いかに社会奉仕に精を出そうと、それで強くなれるわけでもない。流祖の存命中に誰もそれを指摘しなかったのは子弟の分限をわきまえていたからに過ぎず、おそらくは三代目を嫡伝するはずの総三郎がいまだ必死になって世直しにかけずりまわっているようでは、いずれ武芸の本義を見失い、否応なく道統は衰えてゆくだろう。

また、娘の豊にしてみれば、世のため人のためにと日夜奔走するのはかまわないにしても、そのために女房子供をほったらかしにするなら本末転倒もいいところなのだ。木更津や近隣諸村の人々は親しみを込めて総三郎のことを「オヤジ」と呼ぶのであるが、実心齋と豊にかぎってはぬきさしならぬ憤りを込めてそう呼ぶ。

「なを、おじゃまするよ」

総三郎が縁側に両刀を置いたとき、なをは土間で味噌炊きしたばかりの一斗樽を覗き込んでいた。今回は塩の加減がうまくいったから、来年はきつと美味しい味噌ができると思うと、しぜんと口元がほころんでしまう。

「いらっしやい、オヤジさま」

総三郎の用向きはいつものことだからわかっている。お茶を所望しに来たのである。

「さつきな、そこで豊とすれ違ったのだが、あの様はいったい何事か。気でもふれてしまったかと心配なのだが、なをは何か知っておるかね」

それを聞いてなをは、豊の気持ちに敏感に察した。

「オヤジさま、あれはね、豊姉さんのお洒落ですよ」

と、少々咎める調子で答えながら、総三郎の好物のかき餅を差し出した。

「あんなものがお洒落なのかえ。お洒落といえば花魁のでっかい髷とかでないのか」

「オヤジさまは、豊姉さんになんて言葉をかけたんです？」

「気は確かかと」

「姉さん、怒ったでしょう」

「怒った。いつもわしに怒っているな」と苦笑いした。

総三郎はよくここへ来て、なをが焼いたかき餅を食べる。一日中近隣の深刻なもめ事を調停して歩き、夜は遅くまで稽古をしているから、なをがもてなしてくれるこのひと時に、ほっとため息をつくようなやすらぎを覚えるのだった。大河内の女たちは早逝するものが多く、先代の嫡妻である久も病に伏せていたから、実質的に奥向きを取り仕切っているのは鶴と豊である。総三郎は追い出されるような格好で奉公人の長屋で寝起きしており、家のどこにも居場所がない。

「なを、自愛せよ。無事に丈夫なねんこを産んでくれな」と、総三郎はこれまで何度も言った。けれども、不二心流の道統を継ぐべき男子を、という趣旨のことを言ったことは一度もない。これはなをにとって見逃せないことであり、世の男たちの多くが「男子を産め」などと平然と言うのだから、オヤジさまはほんとうは、奥さんや豊姉さんへの愛情が必ずしも薄いわけではないのかもしれない、剣一筋に生きてきて、女の扱いに不慣れなだけなのかもしれない、と想ったりもするのである。

総三郎はいつもかき餅をたらふく食べて、三千太郎が道場から帰ってくると夜稽古へ出かけてゆく。一緒に晩御飯でも、と引き留めてもそれに応じたことはなく、ああ見えて実は細かい気配りのできる人なのかもしれない、などと、若夫婦の夕餉の話題にのぼることもしばしばあった。が、この晩にかぎっては、三千太郎が帰宅すると待っていたとばかりに身を乗り出した。

「明日、わしに同道してくれぬか」

いよいよ米穀商との交渉が決裂しかけているという。相手側も総三郎との対決を不可避とみたか、無宿者を金で雇い、刀槍まで買い集めているというから、もはや刃傷沙汰は避けられぬところまで来ている。

こんな物騒な話を、なをが同席している場で話してしまうあたり、総三郎が無神経と言われる所以であろうか。

一通り状況を聞き終えると、三千太郎は眉をひそめた。

「木更津の商人も、そこまで墮落しましたか」

「世も末よ」総三郎は腕を組んだ。

「明日が最後の交渉となろう。決裂したら血を見る騒ぎになる。だが、絶対に死者を出すわけにはいかぬ。こちらは寄棒と刺又を武器にする」

「かまいません」三千太郎はうなずいてみせた。

総三郎が出て行った後、なをはむつつりと押し黙ったままであった。いつもなら味噌汁の実や旬の魚のについて語り出すなをが、なにやら怒った様子でご飯を食べている。蒔絵漆器の飯椀に軽く一杯で腹のふくれるなをが、今宵は三千太郎のおかわりより先に飯櫃を開けて二杯目をよそっている。気が高ぶっているらしい。

「あじょうした、なを、そんなに食べて」

三千太郎はあつけにとられた。さすがになをのただならぬ様子に困惑している。

「無神経すぎます」なをは口を動かしながら三千太郎の方に目を向けない。

「豊姉さんの気持ちが変わった気がします。女のいる前で血を見る騒ぎになるとか、棒とか、刺又とか、不謹慎です。お腹の子にもさわります」

「そうだった、確かに、なをの言う通りだ」

「だっぺえ！」と腹立たしさのあまり土地のことばが口をついて出たが、しばらくして少し落ち着きを取り戻すと、

「そうはいつでも、町の人たちは大変ですよ。うちはこうしてお米を食べることができ

るけれど……」

なをは膳を脇へよけて両手をついた。

「取り乱してしまい、申し訳ございませんでした」

三千太郎も膳をよけて一膝進めると、なをのからだを起こしてきつく抱きしめた。

買占めに走る米穀商の数は日ごとに増えている。山手通りの糶屋、相善支店、田面通りの柿屋、久留里屋、本町の山口屋、吾妻の加賀屋、丸一、仲片町の川崎屋、弁天町の上山屋である。中でも首領格の糶屋は、日銭で雇った無宿者に帯刀までさせている。そこへ乗り込んだ総三郎の背後には、藍染の羽織を纏った三千太郎と八刃勝壽以下、若干名の若者が従っていた。

鉢金を締め、鎖籠手まで着けた島屋門の出で立ちに恐れをなしたのか、店の用心棒たちはあっさりと総三郎の通行をゆるした。

かまちへ上がった総三郎は、帳場格子の前に容儀を正して座ると、膝を詰めて糶屋の主人をにらみすえた。

「諸物値上り、物情騒然たる折柄、かくの如き事態ともなれば、代々木更津の米商は在米を救恤するの約あり。よもや忘れたとは申すまいな」

店内にまであふれかえった野次馬の人だからから、そうだそうだと喝采が起こった。

「ここで我らと一戦交えるか、さもなければ速やかに救恤につとめよ。もし利欲を恥じる心あらば、今後は通常の市価で商いすべし」

総三郎の詰責に震え上がった店主は、平身低頭の姿勢で証文に署名した。

糶屋の暖簾をくぐって引き上げてゆく総三郎に、町の人々が拝むように手を合わせた。

喝采に包まれた山手通りを歩きながら、勝壽は納得したようにささやくのだった。

「もしオヤジが乗り出さなかったら、住民の多くは年を越せなかったはずだ。おれは不二心流の流儀を誇りに思うよ」

年の瀬も差し迫ったある午後、めずらしく朝三郎が外出した。以前から欲していた美勇水滸伝の浮世絵が絵草紙屋に届いたからである。片足を少し引きずるようにして歩く朝三郎がぐり戸から出るのを見かけた茂三郎は、手代に店をまかせて小走りに後を追った。

「朝さん、ひさしぶりにおしゃべりでもしねえか。茶でもおごるぜ」

「いいよ、ちょっとそこまで、行くだけだから」

「じゃあ用事を済ませてからでもかまわねえさ」

と絵草紙屋までついてきてしまった。

八犬士や武者絵を眺める朝三郎の傍らで、茂三郎は春画の類を手にとって「ほほう」などとあらぬため息をつくのだった。

「コンモ、ほんとに、うつつうしい。先に、帰っててくれよ」

そう何度もあしられながらも、結局は朝三郎を白壁造りの上品な茶店に引っ張り込んだあたり、さすがは商人の粘り強さといえようか。

兎をかたどった白い練り物を頬張り、抹茶をすすった茂三郎は、年末の慌ただしさから少し解放されたようなくつろいだ笑顔をみせた。

「なあ、朝さん。春になったら、少し店に出てみないかい。いつかは幸左衛門を継ぐことになるのだから、今から少しずつ仕事に慣れておくにこしたこたあねえって思うんだよ。

おれが番頭でいるかぎり、朝さんに苦労なんてさせねえから」

浮世絵を眺めながら煎茶をすすった朝三郎は、

「店なんて、継ぎたいと、思わない。コンモが、幸左衛門になればいい」とにべもない。

「紺屋は奥が深くて楽しい商いだぜ。しかも島屋は、おれたちが生まれ育った家じゃないか。一緒に守っていこうぜ」とこちらもゆずらない。

茂三郎の方が年長だが、儒教的な家の序列を心得ている茂三郎は、建前ではなく芯から朝三郎を支えてゆきたいと願っている。

時報の鐘が六つ鳴る頃、お勘定をしている茂三郎を置いて一足先に往来へ出た朝三郎は、夕闇に身を潜めていたとおぼしき男たちに行く手をふさがれ、たちまち取り囲まれてし

まった。全員黒い頭巾で顔を覆っており、刀の柄に手をかけている。路上の女たちが悲鳴を上げて駆け去り、近所の飼い犬がかしこで吠え出した。

頭目とおぼしき男が朝三郎の正面に立ちはだかり、ハバキの冷たい音を立てて刀を抜いた。朝三郎は色を失って茫然と立ち尽くしていた。

突如男の頭が大きく横に揺れたのは、茂三郎の投石が命中したからである。続けざまにつぶてを打つと、すかさず囲みの中に駆け入った。

「朝さん、ここはおれが防ぐから、どこか安全なところへ隠れておきな」

朝三郎は慌てて天水桶の陰にしゃがみ込むと、頭を抱えてうずくまった。

幸いにも、茂三郎には道中差しがある。外へ出るときは必ず携帯しているのである。素早く軒下へ身を寄せたのは乱闘の場合その方が安全だからで、茂三郎は鞘を払って抜き身を下段に構えた。

この落ち着き払った態度を見て、暴漢たちは機先をくじかれたように、たちどころに引き上げてしまった。

茂三郎は天水桶に駆け寄ると、

「朝さん、もう心配ない。怪我してないか」

涙目になって取り乱している朝三郎を抱き寄せて、背中を強くさすってやった。

後日あの連中は、米穀商の雇った無宿者ではなかったかと憶測を呼んだ。島屋門への嫌がらせであり、中でも心身脆弱な朝三郎を狙ったと考えれば思い当たるふしもある。が、連中の誤算は、びんつけ油で鬚を光らせた茂三郎がただの番頭ではなく、文武両道をもつて家訓とする大河内の身内であることを知らなかったことだろう。

心無い人々は、島屋火事の貧乏神が、今度は天水桶の中で小便をもらしたなどとまことしやかに噂し合って、その後もあからさまに指をさして嘲笑する者さえいた。

明けて正月、慶応二年の餅つきは、例年通り八劔八幡神社の境内に各地の門弟が集ってにぎやかに行われたが、朝三郎は姿をみせなかった。毎年お愛想程度には顔を出していた

ことを思えば、以前よりもかたくなに人目を避けるようになってしまったらしい。

朝三郎が襲撃されたことに島屋門の誰もが心を痛めていたが、中でも実母である久の憔悴ぶりは深刻であった。労咳のあるところへ気鬱の病を併発したのではないかと医者は診ている。漢方薬も民間薬も欠かさず服用しているが、日ごと衰えていく姿は誰が見てもあきらかだった。

ただ一つ希望があるとすれば、一時は粥しか受けつけなかった久が、なをの作る料理だけは食べるようになったことである。米の炊き方から塩加減に至るまでいっさい手ぬかりのないなをは、その都度久の体調に合わせた献立を考え、新鮮な食材を買いに行く手間も惜しまない。

始めのうち、久はなをを遠ざけていた。

なをが離れに越して来たときも祝いに訪れなかったし、先代の正妻としてなをを家に迎え入れる気遣いすら皆無であった。いかに三千太郎が妾の子であったにせよ、この時代の結婚は「家」に嫁ぐという意味合いが圧倒的に強かったことを思えば、久の態度はあまりにも冷たい仕打ちと言わざるを得ない。しかしなをはそのことについて一言も不平をこぼさなかったし、久の食が細くなっていく一方だと知っては、一言のねぎらいもない久のために朝晩の食事を作り続けた。

日によっては起き上がる事さえままならず、なをが匙を使って食べさせることもあった。粥に息を吹きかけて、そっと口へ流し込む。ある時、そんな咀嚼の合間、久はふと生気を取り戻したかのように口元に笑みを含んで、

「わたしもまだ元気だった頃は、お金に糸目もつけないで、江戸からくわゐ金団だの、越前のウニなんぞを取り寄せては食べたものですよ。でも、いまこうして食べているあなたの粥が、これまで生きてきた中で、いちばん美味しいかもしれないね」とかすれた声で言った。なをは涙がこぼれた。

それ以来久は、容態の良いときは、ぽつりぽつりとなをを相手に昔話などをするようになった。

久の思い出話にたびたび現れる先代の一郎は、なをとっては義父だから、聞けるだけのことは聞いておきたいと思った。久はすでに死期を悟っているのかもしれない、熱心に耳を傾けるなをに包み隠さず夫婦の来し方を語るのだった。

一郎と久は、始めからうまくいっていなかったという。二人とも富家の生まれで何不由なく育ち、一郎は前髪を落としたばかり、久は月事をみたばかりの若かさでもあったから、互いを思いやる気遣いが未熟であったのは間違いない。離縁をほのめかすことばさえ出てくるようになっていたが、安政年間の島屋火事以来、二人の絆が深まったという。

「町中の人たちから非難の目を向けられることになったから」

久は往時を回顧して苦笑した。

島屋はその後、売り上げのほぼすべてを灰燼と帰した町の復興に投入することになる。しかしそれでも商売が傾かなかったのは、幸左衛門や孫左衛門の並々ならぬ経営力と、不二心流の隆盛のおかげであつたらう。

朝三郎の母という立場は当然肩身の狭いものであつた。火傷で奇態となつた我が子が引きこもりがちなのも、見ていて辛かつた。一方で妾腹の双子の方は健やかに育ち、特に三千太郎などは片言のことばをしゃべるようになった頃から、早くも道場にある鎖鎌をまるで玩具のように振り回し、しかもその振り回し方が術理にかなつていゝといつて中村一心斎や大人たちを喜ばせた。これが島屋に生まれた男子にとってどれほど幸福なことか、久は悔しそうに眉をしかめるのだった。朝三郎は生来病弱で、もし不幸な火傷を負わなかつたとしても武芸者として身を立てることはかなわなかつただろうし、ならば算盤の方はどうだったかと思ひ返しても、茂三郎のような利発さがあつたわけでもなく、縫之進のように器用でもなかつた。今となれば率直にそう述懐しつつも、我が子への愛情はゆるぎなく、あれで顔に火傷がなかつたら父親に似て美しい面ざしなんですよ。そう言つて微笑むのだった。

生さぬ仲の三千太郎や常盤之助を疎ましく思うのも無理からぬことであろうし、島屋火事以来ずっと身も細る気持ちで生きてきたのだろう。久の胸中にわだかまる悲しみを思う

とき、朝晩の御膳を整えながら、なをはふと涙ぐんでしまうこともある。だから久が、「あんたが朝三郎の嫁だったら……」と凶らずも口走ってしまったとき、なをはどんな表情をすればいいのかわからず、黙ってうつむいてしまった。

二月になって、しばらく木更津を離れていた「若先生」こと正道が突然帰省した。

西小笹村の領主である菅沼氏に随伴して甲府へ出張し、そこで剣術指南役を勤めていたが、病で辞したのだという。その血色のいい顔色みるかぎり、どうやら方便であるらしい。

正道を歓迎するため、島屋の道場に門下が集まって祝宴を催した。

戸障子を開け払うと、海から吹くそよ風が心地いい。故郷の潮の匂いを確かめるように正道は深く息を吸った。

集まった門弟に酒盃が配られると、幸左衛門の音頭で乾杯がおこなわれた。

しばらく盃をさしながら挨拶を交わして後、正道はやおら襟を正すと一堂を見回した。

「文久三年のことであるが、京の等持院に安置されていた足利將軍三代の木像の首が持ち去られ、後日三条河原に晒されたことがある」

それを聞いた門弟たちは顔を見合わせながら、

「木像の首を梟首したのかえ。なんてまあ幼稚ないたずらか」と失笑した。

しかし、正道はくすりとも笑わない。

「犯人は尊王攘夷を唱える浪士たちだった。この事件が看過できんのは、連中が公然と倒幕を主張したからだ。以前は彼らの言い分にも耳を傾けてきた京都守護職が、この事件以後、言路洞開の策を改めている」

木像の首を晒した浪士たちは、捨札にこんな文言を残していたという。

へ逆臣である三賊の醜像に天誅を加える。足利三代の逆賊に劣らぬ者の罪悪は足利尊氏より大きい。く

足利三代の逆賊に劣らぬ者、とは、徳川將軍家のことを指している。

時をさかのぼること五百三十年前、〈建武の乱〉で武家の足利尊氏が後醍醐天皇と敵対したのは周知の事実であるが、その足利氏と徳川將軍家が同じ穴のムジナであると言わんがために行われた犯行だったのである。癸丑以来、孝明天皇は外国との通商に猛反対している。いかに外圧に屈したとはいえ、天皇の意向を無視して貿易を始めた幕府は逆賊に等しいと批判されたのだ。これを機に、京都守護職は浪士の嚴重な取り締まりに乗り出し、「有志の者たちで結成された新選組なる一団が、守護職の配下となって京師の治安維持に当たっている。殊勝なことに、その中核をなすは武州多摩の農民たちであり、天然理心流の同門であるという。我らも大いに見習うべきではないか」

正道は扇子を膝に突き立てて、さらに語気を強めた。

「近ごろ、幕政を批判する声が一段と喧しい。徳川多年の恩に報いるは、まさにこの時であろう。由来我が父祖の地は、木更津がなくとも江戸は立つが、江戸なくして木更津は立ちゆかぬと言われてきた。我らの生活を守るためにも、上様のためにも、今後、島屋門として何ができるかを考えてゆきたいと存ずる。皆々、如何か」

もとより総三郎に異議はなかった。「賛成する」という一声に、皆が同調したかに思えた。

しかし一人だけ、腕を組み、目を閉じたまま、異議を唱えたのは伊藤実心齋である。

「やはり我が一門も、こうなってしまうのか。江戸の北辰一刀流も、鏡新明智流も、時勢にうかれた書生たちが道場に政事を持ち込んでおるそうな。我が流祖は、確かに治国安民を唱えておる。それこそどの流派よりも声高に世直しを唱えておる。しかしその一方で、錬気養心を重んじ、心を臍下に落として心の転動をせざるようにとも教えておるのだ。これは両立できることなのだろうか。つまり、政事に挺身しながら、心気を養うことが可能なのかどうか。わしは剣の道を極めたいと欲するゆえ、錬気養心の道をゆくしかない心を決めておる」

そう言い終わると、ゆっくりと立ち上がり、両刀を腰に収めた。

「わしはここで別れよう。だが、くれぐれも忠告しておく。政事に足を踏み入れるなら、

先日罪もない朝三郎が危険にさらされたという事実を胸に刻んでおけ。それだけの犠牲を払う覚悟でやるがよい。総三郎、正道」

二人を一瞥し、

「おぬしらが死んでも、わしが不二心流の道統を後世に伝えよう」と言い捨てて退出してしまった。

総三郎は何とも言えぬ寂しさを覚えて黙り込んでしまったが、正道の方は割り切った様子でさらに自説を述べた。

「幕府が関八州に改革組合村を編成させて以来、村役人に治安維持の権限がゆだねられています。この権限を島屋門が掌握することで、速やかに京の新選組にも似た一隊を編成し、我が木更津に佐幕の一大拠点を築きたいと欲する」

この大胆な提案に対し、幸左衛門は腕を組み、憂色を示した。

「その新選組なる者どもは京都守護職配下とのこと。ならば会津松平家のお預かりであろう。我らも幕府への忠勤に励むなら、公的な後ろ盾が必要となる。そうでなければ何をしただところで私見私闘でしかない。この件、幕府内でしかるべき要職に就かれているお方にご承認いただかなければなるまい」

「仰せの通りです」正道は頭を下げた。「もし、おゆるしいただけるなら、わしが江戸へ参って渡りをつけてきます」

島屋門の長老の中で、もっとも博学なのは八劍勝秀であろう。しょうじゅの父であり、八劍八幡神社の現宮司である。少し伸ばした顎髭が学者のような雰囲気を醸し出しているのだが、眼光の鋭さはやはり武人のものであった。

「先生はどう思われる」

正道に促されると、美髭をなでながらしばし思案に暮れた。

「木像梟首事件には、国学の徒が複数かかわっていたそう。一部のはねっかえり者が尊王の激情にかられて犯した愚行であろう。しかし、今や長州のごときは一藩まるごとその激情にかられて動いておる。帝を自分たちの手で奉ろうと会津中将に戦を挑み、果ては禁

裏に発砲する始末。浅慮極まって外国船を砲撃し、こてんぱんに反撃されて領内を蹂躪されたとも聞く。あの藩の命脈もそろそろ尽きるであろうが、西国で不穏が続く昨今、上様のお膝元が手薄になっておるのは確かであろう。ここ房総は、江戸湾防備の最前線であり、御府内の米蔵でもある。にもかかわらず、天領を統べる行政機関さえない。その不備を島屋門で補おうというなら、なるほど治国安民の教えにかなっている」

「しかし」と、友野七左衛門がまったをかけた。

「農繁期が来たら、島屋門の半分は国事にかかわっている暇などなくなりますぞ。こう言っただけは身もふたもないが、我らの本分は家業にあり、平素は地域の治安維持を自主的に請け負っているだけなのだ。御公儀からそれなりのお給金でもないかぎり、夫役程度の働きしか望めぬだろう」

しばらく議論が続いた。

どちらかといえば三千太郎は、実心齋の意見に賛同している。国事などに奔走する暇があったら、武芸百般に通じたい。稽古を積んで強くなりたい。武芸者である限り、それ以外に何を望むことがあるのだろうか。しかし、傍らにいる常盤之助の目は、じっと議論の行く末を見守っていた。三千太郎がその眼差しに気づかなかったのは、あまりに距離が近すぎたせいであつたらうか。

結局結論が出ないまま祝宴は散会となった。正道が慥然とした面持ちで下駄をつっかけると、

「ちよっといいかい」

常盤之助に呼び止められて、二人は道場の裏へ連れ立って行った。

「おれはマサ兄イの話聞いて、正直なところ驚いている」

「どうした常盤、そんな神妙な顔をして。おもえらしくもないじゃないか」などと茶化したが、取り合わない様子で常盤之助は問いかけてきた。

「おれたちのような商家の出でも、御公儀のお役に立てるのかい。ここいら辺に知行地を持つ旗本や代官を差し置いて、そんなことが本当にできるのかい」

常盤之助の眼差しを見て、その心情を汲み取った正道は、確信に満ちた表情で答えてみせた。

「できる。安政の改革では時の老中が庶民にも意見を求めたではないか。いま都で過激派浪士を震え上がらせている新選組は百姓の出だ。時代は変わろうとしている。もはや家格でも身分でもなく、志と実力が問われているのだ」

「マサ兄ィ、おれなんかでも役に立てるか」

「当たり前じゃないか。おまえほどの者が何を言ってる」

「おれも、御公儀のために尽くしたい。マサ兄ィと共に戦いたい」

興奮のあまり涙ぐむと、正道も感涙をもよおして常盤之助の手を取り、互いにきつく両手を握り合った。

庭にスマレが咲いている。

「種をまいたわけでもないのに」と言ってなをは戸障子を開けた。

久は床に臥せたまま体を横に向けた。

タチツボスマレだろうか。よい匂いがして、淡紫色が鮮やかだった。

久はじっとその花を見つめていた。

なをが飯櫃を開けるとあさりの匂いがした。干潟のあさは砂が少なくて食べやすい。

塩と醤油で味付けたあさり飯である。

「熱いうちに食べると美味しいですよ」

飯椀にかかるく盛って差し出すと、久はしばらく目を閉じて匂いを楽しんでいた。

「おや、かんぴょうも入っていますね」

「そこが一工夫なんです」

などと、近頃ではすっかり親子のような会話も板についてきた。

海で獲れる食材の香りが、木更津の人々の唇にもなっている。飯にあさりが出てきたら、そろそろ春が訪れる。

久はゆっくりとあさり飯を噛みしめながら、庭のスミレを飽くこともなく眺めていた。なをも一緒に食べながら、つられるように外を見ている。

久は食べ終えた椀を膳に置くと、遠い目をしてつぶやいた。

「わたしはね、正直いって、藍色よりも、菫の色が好きですね」

なをも椀を置いて、そんな久の横顔を見つめた。やつれて頬骨が浮き上がっているが、品のいい目鼻立ちをしている。

「そのうちなをも意識して見るようになるでしょうけれど、菫の色と藍色は、全然別の色味なのです。菫の色は、青みがかった紫。藍色は、深くて濃い青色」

「そんな違いがあるんですね。わたし、全然知りませんでした」

「藍色は、濃い。そして、暗い。わたしはずっと、そんな色の中にいた気がするんですよ。あまりの濃さと暗さに息がつまりそうになったこともある。でも、今は、藍色の中に溶け込んでもいいような気持ちになっています。この頃ね、目を閉じると、いつも同じ風景が見えるんですよ。店先の暖簾が、風に揺れている。藍染の暖簾が、揺れている……」

久は目を閉じていた。その安らかな寝顔を確かめたなをは、飯櫃を抱えて、そっと部屋を出た。

久は再び目を覚まさなかった。

愛染院にある大河内一郎の墓に、久は合葬された。

墓石の左側面に「芳讚湛義妙貞信女」と戒名が刻まれ、正妻の面目をほどこしたようにも思える。

葬儀の間中、朝三郎は引きつった顔を痛々しいほどゆがめて、声を忍んで泣いていた。自室にこもって出て来ないのはいつもの事であるが、かれこれもう三日、女中が給仕する食膳にも手を付けず、雨戸すら開けないとあっては、さすがになをも心配になり、そっとしておいてあげるのもここまでと思うのだった。

店先の掃除を終えた後、姉さんかむりをはずしたなをが部屋まで出向いて「お兄さん」

と数度声をかけたが返事がない。起きているのは気配でわかるから、失礼しますと襖を開けた。

「お兄さん、御機嫌はいかがですか」

「いいわけないだろう」

朝三郎はやおら身を起こして、薄暗い部屋の奥から、鬚の乱れた蒼白い顔をのぞかせた。なをに対してだけは少しばかり偉そうな調子で話すところがある。

なをは大きなお腹を抱えるように部屋の中へ入ると、朝三郎の前に膝をついた。

「何か食べないと体に毒ですよ。ふかし芋でも食べませんか」

朝三郎は、なをのお腹をぼんやりと見つめた。

「ずいぶん、大きく、なったな。いつ、生まれる」

「お産婆さんの話ですと、葉桜のころではないかと」

「死ぬ命も、あれば、生まれて来る命も、あるわけか」

と、自分にしか聞こえないほどの小さな声でつぶやいたようであった。

「食欲がないようでしたら、あさりとわけぎのぬたでも作りましょうか。あさりもわけぎもさつき棒手振りさんから買ったばかりだし、今が旬だから……」

突然、朝三郎はなをの膝にうつぷして、わっと泣き出した。

なをは驚いて目を丸くしながらも、普段は感情の欠片すら表に出さない義兄が、子供のようになやみあげる姿を見て母心にも似た感情がこみ上げてくる。頭を優しく撫でてあげたいとさえ思った。けれども、それがゆるされることなのかどうか、まだ十七歳のなをにわかるはずもない。

「お兄さん、困ります」遠慮がちにささやきかけてみたが、こんなところを誰かに見られたらという動揺もあって、朝三郎の体を強く押し戻した。

はっと我に返った朝三郎は、しばらくなをの顔を見つめていた。やがて下唇が痙攣したように震えだし、大粒の涙が一筋頬をつたった。

「おまえも、心の中では俺のことを、気持ち悪いやつだと思っているのだろう。皆と同じ

ように」

驚いたのはなをの方である。すぐさま首を横に振った。

「もう、出て、いってくれ」

「お兄さん、ごめんなさい、そんなつもりでは……」

「出ていけ！」

なをは立ち上がって廊下へ出たものの、閉めた襖の引手に指を添えたまま、しばらくそこに立ち尽くしていた。

その晩、三千太郎は手を止めて、不思議そうになをの顔を覗き込んだ。

「あじよした、今夜は。ちっとも箸が進まん」

いえ。と慌てて笑顔を取り繕うと、なをは煮豆を箸でつまもうとして、何度も取りそこねた。箸の先が小刻みに震えていることに三千太郎が気づいたとき、なをは動揺を隠しきれなくなって泣き出してしまった。

「あじょうしたあだ、なを、言ってみろ」

「申し訳ありません、三千太郎さん。わたし、お兄さんを怒らせてしまって」

「あにがあった」

「お兄さんは悪くないんです、わたしの態度が悪かったんです」

おおよその事情を聞きだすと、三千太郎は膳をひっくり返さんばかりの勢いで立ち上がり、なをが引き止めるのも聞かず、つつかけを履いて出て行ってしまった。

くれ縁をけたたましく踏み鳴らした三千太郎は、襖を左右いっぱい押し開いた。

「あんた最低だな」

和綴じ本に埋もれた朝三郎は、その音を聞いて頭を跳ね上げた。

「あんだ、やぶから棒に」

「あんたが身内でなかったら、はったおしてやるところだ」

それを聞いて朝三郎は、やおら身を起こした。

「とうとう、本音が出たな。今までは下手に出てやっていたとでも、言いに来たか。おれが、なをに触れて、蠅にでもたかられたみたいにな、不快になったか。おまえは物心ついたときから、大人たちにちやほやされて、さぞやおれのことを、哀れなやつだと思ってきたんだろう？ 剣もやらず、昼間からごろごろしている大河内朝三郎は、一族の恥、幸左衛門の名を継ぐのは自分だと、言いてえんだよな。妾の畜生腹も偉くなったもんだ。立つ瀬が、ねえや」とまくしたてた朝三郎の口角に、白い泡がたまっていた。火傷で頬が強張っているため活舌も悪く、声もかすれてすみがない。

そんな朝三郎を見て、三千太郎は頭から井戸水でもあびたように冷静さを取り戻した。「兄さん、後生だから、なをに当たるのだけはやめてください」

一瞬でも、本気で殴ってやろうとまで思った自分に嫌悪感を覚えた三千太郎は、深く頭を下げ、逃げるようにその場を離れた。

生み月が迫りつつあるなをのお腹は、誰が見ても大き過ぎる。産婆のおハルさんが触診してみたところ、頭とおぼしきふくらみが二つあるように思われた。

「双子かもしれないそうです」

とそれをなをに告げたのは、おハルさんと別室で長らく話し込んでいた鶴であった。

鶴と豊はなををの出産に向けて準備を整えている。

じれった結びを解いて以来、豊は鬘を結うのをやめてしまった。長い髪を後ろで纏めた根結いの垂髪にしている。いかにも武芸をたしなむ女性らしいすがすがしさで、はからずも町の若い娘たちから恋文まで届くほどの人気ぶりだった。

豊は納戸にしつらえた産屋になをを連れていき、

「ほんとうに座椅子でなくていいのかい」と心配そうに尋ねた。

なをは天井から吊り下げられた力綱をそっと引っ張ってみながら、

「豊姉さんが嫌でなかったら、わたしの体を支えてください。それでもいい？」

「なをがそれでかまわないなら、あたしがずっと支えとくよ。力持ちだからさ、安心していいよ」

「姉さんがそばにいてくれれば、心強いです」

産屋には、実家の母親が仕立ててくれた身幅の広い着物や、大量の白い晒し木綿、油紙、食器、胎盤を入れる胞衣土瓶まで用意されている。力綱の真下に竹のすのこも敷かれており、いよいよ出産が近いのだと身の引き締まる思いがする。

一家の家事を取り仕切っている鶴が、そんななをの緊張を解くように笑ってみせた。

「いつ産気づいてもいいように、わたしと豊が始終ついていきますし、クニさんもすぐに駆け付けてくれます。なんといってもクニさんは、双子を産んだ経験がありますからね」と自信ありげにうなずいてみせるのだった。

春の一日、なをと三千太郎は、二人だけのささやかな儀式をした。

大豆をほうろくで炒るのである。菜箸を使う三千太郎の肩にもたれかかるようにして、なをもそれを見つめていた。

よく炒った豆を縁側に用意した台の上に広げて、ごりごりつぶす。こうすると皮がとれる。

二人で向かい合い、一升枡の底でつぶした。潮の香をはらむそよ風が、満開の桜の花びらを散らせていた。

「まめでえ、健康にい、育ちます、ようにく」と小唄を口ずさむように調子を取りながら、なをは豆をつぶした。

木更津の家庭では、赤ん坊に産湯を使わせた後、まめに育つようという願いを込めて、豆ごはんを作って祝う風習がある。これを「ねんねこ茶の子」といった。なをは茶の子に入れる炒り豆を、出産前に三千太郎と一緒に作ると決めていた。

「ねえ、三千太郎さん。そっと秘密を教えちゃいますね」

「秘密なんか、あったのか」からかうように笑った。

「お腹の子、双子みたいです」

「双子？」途端に三千太郎が眉をくもらせた。

「きつと、そんな顔をするなって思っていました。双子は畜生腹っていわれて、三千太郎さんもすごく嫌な思いをしてきたんですよね」

「常盤之助などは、世間をはばかりて戸籍まで変えたほどだから。それでも俺たち兄弟は、陰口を叩かれたもんさ」

「わたしね、どんなに陰口をたたかれてもかまいません。だって三千太郎さんのねんねこを、二人もいっぺんに授かるのだもの。むしろ感謝したいぐらいなんです。それに、わたしの知っている畜生腹は、三千太郎さんと、常盤之助さん。こんな子たちをわたしも産みたい」

三千太郎は目頭が熱くなり、奥歯を噛みしめていないと涙が出そうであった。

「わたしたち、出逢ってから、ようやく一年になりますね。長かったような、あつという間だったような」

なをは一升枡を持つ手を止めて、庭から見える大島桜の木を眺めた。

「ここへ嫁いで、大変だったろう」

「わたし、この家で、いろんなことを学ばせてもらっています。わたしね、子供の頃から論語とか孟子などを読んできたけれど、ここで過ごした一年の方が、ずっと学ぶことが多かったように思います。これからも学んでいきたいし、藍染のことも、もっと知りたい」

桜の白い花弁が散りゆく様は、まるで歌舞伎の紙吹雪のようである。

なをの鼻先に、ひとひらの花びらが落ちてきた。三千太郎は笑ってそれをつまみ取ると、そのまま顔を寄せて、二人はそつと唇を重ねた。

島屋は相変わらず繁盛している。

当主の幸左衛門は老齢とは思えない身のこなしで顧客の接待をしており、大番頭の孫左衛門は帳場にどしりと構えて算盤をはじいている。店内を忙しく動き回っている茂三郎の

鬻は相変わらず清潔な輝きをみせており、その指示に従って手代や奉公人がテキパキと仕事をこなしているのだった。さすがなのは、当世風俗の指南書を出版している江戸表の本問屋が、足げく縫之進を取材しに来ることである。渋茶をすすりつつ、銀のキセルをふかしながら、藍染の色味や着こなしについて語る縫之進に質問を投げかけながら、版元が紙になにやら書き記している。

そんなにぎやかな店先を箒で掃いていたなをは、ふと手を止めて、亡くなった久が夢うつつに見ていた藍染の暖簾を眺めるのだった。明るい日差しの中で揺れている島屋の暖簾。大きなお腹に手を添えて、往来のそよ風にまじる潮の香を吸い込むと、すべてのことに感謝したい気持ちになる。この先どんなことがあっても、乗り越えて行ける気がする。

そしてなをは、破水した。

「さあ、なを、大船に乗った気持ちでいなさいよう」

豊は襷がけをしてなをの頬に軽く触れた。弱い陣痛が始まっている。

店の小僧が産婆のハルさん呼びに走った。

痛みが起こる間隔が規則的になり、徐々にその間隔が短くなっていく。

「始まるよ」

ハルさんの一言を合図に、なをは豊と鶴に支えられながら納戸に入った。

三千太郎が、

「しっかりな」と声をかけると、なをは三千太郎の目をじっと見つめ返して、うなずいてみせた。

力綱を握りしめ、背中を豊が抱える。ハルさんが正面に座り、鶴とクニが介助のために付き添った。この時代の出産は座産である。

「まだ開ききってねえから、強くいきむんじゃないよ」

ハルさんが声をかけたが、なをはすでに玉のような汗をかいて苦しみ、時おり声を上げてうめいた。

「声出すでねえぞ、はしたねえ」とハルさんが叱った。出産中に声を出すのははしたないこととされた時代なのである。

どんなにこらえても、「ああああッ」と悲鳴のような声をあげて苦しむなをの様子は尋常でなかったかもしれない。ついには痙攣まで起こすと、これもハルさんの指示で、舌を噛み切らないように丸めた布を噛ませた。

「双子だからね、難産になりそうだ」とまわりに言い聞かせるようにハルさんがつぶやいた。

「なを、がんばるんだよ」豊はしっかりとなをの体を背後から抱きかかえ、頭をなで続けている。

産道に手を添えたハルさんが声を励まして言った。

「そら、いきめ」

力綱にすがって、なをは全身でいきんだ。噛んだ布の奥から悲鳴のような声を上げながら。

座敷で膝を揺すっていた三千太郎は、気持ちが悪く落ち着かず、仏間に駆け込んで切に祈願する他すべもなかった。出産というものは真剣勝負のように恐ろしいものだどつくづく実感し、女は武芸者よりも強いのではないかと思ったりもする。

気が付くと、同じ仏間に朝三郎が座っていた。

扇子の折りをぱちんと鳴らしている常盤之助と、キセルをくわえたままぼんやり煙草盆を見つめている縫之進もいた。

夕闇が迫り、明り障子に夜のとばりが下りる。

女中が縁側の釣灯笼と部屋の行灯に火を入れた。

漆黒の空に、大粒の星々が瞬いている。

納戸を橙色に照らしている五十匁の口ウソクが一本燃え尽き、新たなものが燭台に立てられた。

なをを絞りに出すような声を上げながら力綱にすがっている。

いきめ、いきめ、と叫んでいたハルさんが、姉さんかむりしていた手拭いはずし、両手で顔の汗を拭きだした。そして、産道をじっと睨み据えながら、大きなため息をついた。

「からつきし、出てこねえ……」

豊は一瞬啞然としたが、すぐ我に返って怒鳴った。

「出てこねえじゃねえでしょ、出してよ！」

なをは両手を震わせながら力綱を握りしめ、全身から湯気がでるほど力んでいる。こめかみに青筋を浮き上がらせ、肩で大きく呼吸し、何度も何度もいきんでいる。

「なを、あたしがついてるよ、がんばって！」

気が付くと豊は涙を流していた。もうどれぐらいこの残酷な陣痛が続いているのだろう。

ハルさんが突然「ああ」とうわずった声をあげると、左右で介助していた鶴とクニの顔から血の気が引いた。鶴が取り乱したように白い晒し木綿をハルさんの手元に押し渡す。

大量に用意してあった木綿が、またたくまになくなってしまった。なをは力綱に身を持たせ掛けたまま、肩で息をしている。

豊が首を伸ばして覗き込むと、なをの股の間に、滴るほど鮮血を吸い込んだ木綿が山とっており、それでも足りないかのように、竹のすのこが大量の血にまみれている。赤ん坊の姿はない。ただ、血の海であった。

薄っすらと閉じかけたまぶたの奥で、なをの瞳が揺れていた。力綱を握っていた両手がすべるように離れ、すべての重さが豊の体にかかった。なをの顔が横に傾き、豊の頬に当たった。

「なを、なを、」豊はなをの体を揺すった。どんなに揺すっても、ぐったりと両腕を垂らしたまま動かない。豊は固唾を飲み、しばらく耳をすました。

「息、してない……」

豊はハルさんたちを見回して声を上げた。「息してないよ！」

さっきまで火照っていたなをの体から、みるみる体温がなくなっていくのがわかる。

「なを、しっかりして！」

声をかけながら激しく体を揺さぶったが、なをの体はただ揺れるばかりだった。

「気付けをッ、酔を持ってきて、はやあ！」

その叫びを聞いて我に返ったクニが、納戸から飛び出して、土間の女中に向かって声を上げた。「お願い、酔を持ってきて！」

何かただならぬ事態が起こっているのを察した三千太郎が納戸へ入ろうとすると、クニが立ちふさがって押しとどめた。

「母さん、通してくれ、何が起きた！」

クニは震える足を踏んばりながら三千太郎に目を据え、

「しばらくここで待っていないさい」と強い口調で言った。

豊はなをの体を抱きしめながら、冷たくなっていく体を必死にさすり続けた。

「お願い、なを、目え覚ましてえ……」

酔を布にしみ込ませて、なをの鼻先に当てた。祈るような思いで、なをがむせて目を覚ますのを待った。

「なを、なを、」

何度も体を揺すり、豊は声をかけ続けた。

白い着物を汗でびっしょり濡らしたまま、体だけが冷たくなっていった。

にわか慌ただしく、女中たちが納戸へ入ったり出たりした。手桶を持つ者、寝具を抱える者もあり、そのたびに三千太郎が引き止めて「なをはどうしているんだ、元気なのか」と尋ねたが、彼女たちは黙して語らず、涙ぐんだ目をそらしてそそくさと通り過ぎるのだった。

どれぐらい時間が経っただろうか。

ようやく三千太郎はクニに呼び出された。

「なをは、お腹のねんねこと共に、彼岸へ旅立ちました。ミチタに赤不浄を見せるわけにはいかなかったので、産屋を片付け、着物などもこちらで変えました。まだきつと魂はここに居るはずですから、最後までがんばったなをを、ねぎらってあげなさい」

襖を開くと、なをはいつの間にか死装束を身につけて横臥していた。枕元に櫛と香が供えられていて、逆さ屏風までしつらえられている。

その傍らに豊が正座しており、三千太郎の顔を見るなりわっと泣き崩れて、「ごめんなさい、ごめんなさい」手を付いてわびた。

三千太郎はそばにしゃがんで、豊の肩にそっと手を置いたが、目の端に見えているなへの蒼白い死相が、あまりにも唐突で、現実のものとは思えなかった。

「すまないが、しばらくなをと二人にしてもらいたい」とささやく声がうわずり、喉元に熱い大きな塊がこみ上げてくるようで、息をするのも苦しいほどだった。

この晩、三千太郎は朝までなをに添い寝した。眠っているようにしか思えなかった。しかし肌に触れてみると、少しのぬくもりもなく、柔らかさも失われていて、そこに厳然たる死を垣間見る思いがする。お腹のねんねこを見ることは、ついになかった。なをの腹ごしに、二つのふくらみを撫でることだけが、父親としてやれる唯一のことなのであった。

一晩中なをの顔を眺めていても、涙が出て来なかった。朝になったら目を覚ますのではないか。そんな予感の方が現実的に感じられる。このまま目覚めない方が不自然なのであって、もし、目覚めない方が現実なのだとしたら、悪い夢でもみているのではないか。

三千太郎は、なをの体を掻き抱いた。そのまま、いつしか夢とうつつをさ迷うようにまどろんでいた。明け六つ時の淡い茜色が障子を透く頃、三千太郎は目を開けて、なをの頬に触れた。そして、「なを、朝だよ」と声をかけた。

いつもなら、なをが愛用している伽羅の油の移り香が着物に残る。しかし今朝はなんの匂いもしないし、目の前になをの体があるにもかかわらず、人の気配すら感じられない。

三千太郎は身をこごめてなをの額に頬を押し当てると、叫ぶような声を上げ、全身を震わ

せて泣いた。

なをの葬列を、木更津中の人々が沿道で見送った。喪主の三千太郎は編笠をかぶり、豊が位牌、常盤之助が香炉を持ち、会葬者は羽織袴を着用して、柄を白い紙で包んだ一刀を帯びている。

葬礼は愛染院でしめやかに執り行われた。

寝棺の中で重ねられたなをの手に、生前彼女が宝物にしていた「鼓草綿毛之舞」の手拭いが握られていた。これを見た縫之進が、

「美しい魂よ、安かれ」とささやいて、親指の先で目のふちをぬぐった。

身内の手で、故人の衣服、調度、六文銭などが納められた。

朝三郎は、おそらく相当値が張ったであろう鼈甲の斑入り櫛を、誰にも気付かれぬよう、そっと手向けたのであった。

なをの墓は、一郎と久が合葬されている一基と、大河内家の家族墓の間に建てられた。

慶応二寅星

栄樹院直心妙了信女

五月上九日

と墓石の正面に刻まれている。なをの生前を知る僧侶がつけた戒名だろうか。この文字を見るだけでも、彼女の人柄が思い浮かぶようである。

側面に

大田村 地曳新兵衛娘

と刻字されている。享年十七歳。

三千太郎は一人で、かつてなをと歩いた道をたどった。

矢那川からベカ舟で遡上し、大田村の集落をぬけて、恋の森の坂道を登った。傍らになをの息遣いを感じながら、なつかしい思い出をたどり直そうとしている。

一年前と、何も変わっていないかった。山頂からは木更津の町と、湊と、広大な干潟が望まれた。富士山も、優雅な裾を広げている。橘神社もそこにあった。

欠けてしまったのは、なをのぬくもりだけである。

あの日のなをの面影が、今もまだ、そこに見えるようであった。

記憶の中のなをが、澄んだ瞳をこちらに向けた。

「うちはお正月に、たくさんもち米を搗くんです。おろした山芋を少しずつ入れながら搗きます。それを小さく切って、乾かして、食べるときほうろくで煎ると、ぷくつとふくらんで、ふわふわのあられになるんです」

「ミコは、ここに立って海を眺めながら、吾妻はや、ってささやいたそうです。わが妻よ、ああ……。って」

「三千太郎さんも、大切な人を失ったら、ここを立ち去れなくなってしまいますか」

もう、生きていけない、と思った。この悲しみを、乗り越える自信がなかった。

君去らず袖しが浦に立つ波の

その面影を見るぞ悲しき

三千太郎は、両手で顔をおおって泣いた。

なをの面影は、いつまでも、優しく微笑みかけてくる。